

毛沢東主席の
人民戦争についての語録



万国のプロレタリア団結せよ！



讀毛主席著作
主席著作
主席著作
主席著作
主席著作
主席著作
主席著作
主席著作
主席著作
主席著作

毛主席著作

林彪

毛主席の著作を読み、
毛主席の話を聞き、
毛主席の指示どおりに仕事をし、
毛主席のりっぱな戦士になろう。

林彪

目次

階級社会では、	
革命と革命戦争は不可避である……………	1
鉄砲から政権がうまれる……………	3
帝国主義とすべての	
反動派はハリコの虎である……………	6
戦争の勝敗を決定する要素は	
物でなくて人間である……………	11
革命戦争は大衆の戦争である……………	13
農村根拠地をうちたて、	
農村をもって都市を包囲する……………	17
人民解放軍は革命の政治的任務を	
遂行する武装集団である……………	21
人民戦争の戦略・戦術……………	26

戦争のなかで戦争を学ぶ——

これはわれわれの主要な方法である……34

『紅旗』、『人民日報』、

『解放軍報』のあとがき………39

階級社会では、革命と革命 戦争は不可避である

戦争——私有財産と階級がうまれてからはじまった、階級と階級、民族と民族、国家と国家、政治集団と政治集団とのあいだの、一定の発展段階での矛盾を解決するためにとられる最高の闘争形態である。

〔中国革命戦争の戦略問題〕（1936年12月）、『毛沢東選集』第一巻

階級社会では、革命と革命戦争は不可避であり、それなしには、社会発展の飛躍を達成することもできなければ、反動的支配階級をうちたおして人民に政権を獲得させることも

できない。

「矛盾論」（1937年8月）、『毛沢東選集』第一巻

歴史上の戦争は二つの種類にわけられる。一つは正義の戦争であり、もう一つは不正義の戦争である。進歩的な戦争はすべて正義の戦争であり、進歩をはばむ戦争はすべて不正義の戦争である。われわれ共産党員は、進歩をはばむすべての不正義の戦争に反対するが、進歩的な正義の戦争には反対しない。正義の戦争にたいしては、われわれ共産党員は反対しないばかりか、積極的に参加する。

「持久戦について」（1938年5月）、『毛沢東選集』第二巻

戦争——人類がたがいに殺しあうこの怪物は、人類社会の発展が、終局的にはこれを消滅するし、しかも遠くない将来に消滅するにちがいない。だが、それを消滅する方法は

ただ一つしかない。つまり、戦争によって戦争に反対し、革命戦争によって反革命戦争に反対し、民族革命戦争によって民族反革命戦争に反対し、階級的革命戦争によって階級的反革命戦争に反対することである。

「中国革命戦争の戦略問題」（1936年12月）、『毛沢東選集』第一巻

鉄砲から政権がうまれる

革命の中心任務と最高形態は、武力によって政権を奪取することであり、戦争によって問題を解決することである。このマルクス・レーニン主義の革命原則は普遍的に正しく、中国においても外国においてもすべて正しい。

「戦争と戦略の問題」（1938年11月6日）、『毛沢東選集』第二巻

共産党員の一人ひとりが、「鉄砲から政権がうまれる」という真理を理解しなければならない。

「戦争と戦略の問題」(1938年11月6日)、『毛沢東選集』第二巻

マルクス主義の国家学説についての観点からみれば、軍隊は国家権力の主要な構成要素である。国家権力を奪取し、保持しようとするものは、だれでも強大な軍隊をもたなければならない。われわれを「戦争万能論」だと笑うものがあるが、そのとおり、われわれは革命戦争万能論者である。これはわるいことではなく、よいことであり、マルクス主義である。ロシア共産党の鉄砲は社会主義をつくりだした。われわれは民主共和国をつくり出すのである。帝国主義時代の階級闘争の経験がわれわれに教えているように、労働者階級と勤労大衆は鉄砲の力にたよらないかぎり、

武装したブルジョア階級と地主にうち勝つことはできない。この意味から、世界全体を改造できるのは鉄砲だけである、と言ってよい。

「戦争と戦略の問題」(1938年11月6日)、『毛沢東選集』第二巻

中国では、武装闘争を離れては、プロレタリア階級の地位はなく、人民の地位はなく、共産党の地位はなく、革命の勝利はない。十八年らい、わが党の発展、強化およびボリシェビキ化は、革命戦争のなかですすめられてきており、武装闘争なしには、こんにちの共産党もありえなかっただろう。血をもってあがなわれたこの経験を、全党の同志はわすれてはならない。

『「共産党人」発刊のことば』(1939年10月4日)、『毛沢東選集』第二巻

帝国主義とすべての反動派 はハリコの虎である

すべての反動派はハリコの虎である。反動派は、見たところおそろしそうだが、実際には、なにもたいした力をもっていない。ながい目で見れば、ほんとうに強大な力をもっているのは、反動派ではなくて、人民である。

「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」(1946年8月)、
『毛沢東選集』第四卷

世のなかのあらゆる事物が二重性(すなわち対立面の統一の法則)をそなえているように、帝国主義とすべての反動派も二重性をそなえており、かれらは本物の虎でもあれば、またハリコの虎でもある。これまでの歴史

で、奴隷主階級、封建地主階級、ブルジョア階級は、支配権力をかちとる前と支配権力をかちとったのちのある時期には、生気にあふれており、革命家で、先駆者で、本物の虎であった。だが、その後のある時期には、かれらの対立面である奴隷階級、農民階級、プロレタリア階級がしだいに強大になって、かれらと闘争し、しかもその闘争がますます激しくなったので、かれらはしだいに反対の側に転化して、反動派になり、立ちおくれた人間になり、ハリコの虎になり、ついには人民によってくつがえされたか、あるいは、くつがえされようとしている。反動的な、立ちおくれた、朽ちはてた階級は、人民の決死の闘争に直面したときにも、やはりこうした二重性をあらわす。一方では、かれらは本物の虎であって、人を、何百万、何千万という人を食う。人民のたたかひの事業は苦難の時代にお

かれ、多くのまがりくねった道があらわれる。中国人民は、帝国主義、封建主義、官僚資本主義の中国における支配をくつがえすために、百余年の歳月をついやし、何千万人も生命を犠牲にして、はじめて一九四九年の勝利をかちとった。みたまえ、これは生きた虎、鉄の虎、本物の虎ではないか。だが、かれらはずいに、ハリコの虎、死んだ虎、豆腐の虎に転化してしまった。これは歴史の事実である。まさか、こうしたものを見たり聞いたりしたことがないとはいえない。それはほんとうに、何千何万、何千何万とある。だから、本質的に見、長期的に見、戦略的に見るなら、帝国主義とすべての反動派を、ありのままにハリコの虎と見なければならぬ。この点から、われわれの戦略思想がうちたてられる。他方では、かれらはまた、生きた、鉄の、本物の虎であって、人を食う。この点か

ら、われわれの政治戦術思想と軍事戦術思想がうちたてられる。

中国共産党中央委員会政治局武昌会議における指示（1958年12月1日）、
「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」の解題、『毛沢東選集』第四巻

攪乱、失敗、ふたたび攪乱、ふたたび失敗、さいごに滅亡——これが人民の事業にたいする帝国主義と世界のすべての反動派の論理であり、かれらはけっしてこの論理に反することはない。これはマルクス主義の法則である。われわれが「帝国主義はきわめて凶悪だ」というのは、帝国主義者はその本性をあらためることができず、滅亡の日まで、けっして凶刃を捨てようとはしないし、また、けっして善人になることもできない、ということである。

闘争、失敗、ふたたび闘争、ふたたび失

敗、ふたたび闘争、さいごに勝利——これが人民の論理であり、人民もまたけっしてこの論理に反することはない。これはマルクス主義のもう一つの法則である。ロシア人民の革命はこの法則にしたがったし、中国人民の革命もまたこの法則にしたがっている。

「幻想をすてて、闘争を準備せよ」
(1949年8月14日)、『毛沢東選集』
第四卷

全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者とそのすべての手先をうち破ろう。全世界の人民が勇気をもち、敢然とたたかい、困難をおそれず、あとからあとへとつき進んでいけば、全世界はかならず人民のものである。すべての悪魔はのこらず一掃されるであろう。

「アメリカの侵略に反対するコンゴ
(レ) 人民を支持する声明」(1964年
11月28日)

戦争の勝敗を決定する要素は 物でなくて人間である

人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である。

「連合政府について」(1945年4月24日)、『毛沢東選集』第三卷

武器は戦争の重要な要素ではあるが、決定的な要素ではない。決定的な要素は物ではなくて人間である。力の対比とは軍事力および経済力の対比であるばかりでなく、人力および人心の対比でもある。軍事力と経済力は人間がにぎるものである。

「持久戦について」(1938年5月)、
『毛沢東選集』第二卷

戦争の偉力のもっとも深い源は民衆のなかにある。日本がわれわれをあなどるのは、主

として中国の民衆が無組織の状態にあるからである。この欠点が克服されれば、日本侵略者は、火の海にとびこんできた野牛のように、立ちあがったわれわれ数億の人民の面前にひきすえられ、われわれの一喝でとびあがり、かならず焼け死んでしまう。

「持久戦について」(1938年5月)、
『毛沢東選集』第二巻

中国の状況についていえば、われわれがたよりにしているのは粟と小銃だけだが、この粟と小銃は蒋介石の飛行機と戦車よりもっと強いことを、歴史は最後に証明するであろう。中国人民のまえにはなお多くの困難が横たわっており、アメリカ帝国主義と中国反動派との共同攻撃のもとで、中国人民は長いあいだ苦しみをなめるであろうが、これらの反動派はいつかはかならず敗北し、われわれはいつかはかならず勝利する。その原因は、ほ

かでもなく、反動派が反動を代表し、われわれが進歩を代表しているからである。

「アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話」(1946年8月)、
『毛沢東選集』第四巻

革命戦争は大衆の戦争である

革命戦争は大衆の戦争であって、大衆を動員してはじめて戦争ができるのであり、大衆にたよってはじめて戦争ができるのである。

「大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ」(1934年1月27日)、
『毛沢東選集』第一巻

ほんとうの金城鉄壁とはなにか。それは大衆である。それは心から革命を支持する幾百万、幾千万の大衆である。これが、どんな力にもうちやぶられることのない、けっしてうちやぶられることのないほんとうの金城鉄壁

である。反革命はわれわれをうちやぶることはできないが、われわれは反革命をうちやぶるのである。革命政府のまわりに幾百万、幾千万の大衆を結集して、われわれの革命戦争を発展させるなら、われわれはすべての反革命を消滅することができ、全中国を奪取することができる。

「大衆の生活に関心をよせ、活動方法に注意せよ」(1934年1月27日)、
『毛沢東選集』第一巻

革命戦争全体の観点からいうと、人民の遊撃戦争は、主力の赤軍とたがいに両腕の関係をなしており、主力の赤軍だけあって、人民の遊撃戦争がないならば、それは片腕将軍のようなものである。

「中国革命戦争の戦略問題」(1936年12月)、
『毛沢東選集』第一巻

この軍隊が強力なのは、さらに、それと呼

応して戦う人民自衛軍や民兵のような広範な大衆の武装組織があるからである。中国の解放区では、すべての青壮年男女が自発的意志、民主主義の原則、生産から離れないという原則のもとに、抗日人民自衛軍に組織されている。自衛軍のなかの精鋭は、軍隊と遊撃隊に参加しているもののほかは、民兵に組織されている。これらの大衆の武装力の呼応がなければ、敵にうち勝つことは不可能である。

「連合政府について」(1945年4月24日)、
『毛沢東選集』第三巻

この軍隊が強力なのは、さらに、それが自己を主力兵団と地方兵団の二つの部分に分けているからである。前者はいつでも超地方的な作戦任務を遂行することができ、後者の任務は民兵、自衛軍と協同して地方を防衛し、その地方の敵を攻撃することに固定されてい

る。このような区分は人民の心からの支持を
えている。このような正しい区分がなければ、たとえば、主力兵団の役割に注意するだけで、地方兵団の役割を無視するならば、中国の解放区という条件のもとで、敵にうち勝つことは不可能である。地方兵団の方では、各解放区の正面戦線の戦いに呼応するために、りっぱな訓練をへた、軍事、政治、民衆運動などそれぞれの活動のうえでいずれもよりいっそう健全な、多くの武装工作隊を組織して、敵後方に深くはいり、敵に打撃をあたえ、民衆の抗日闘争をまきおこして、大きな成果をおさめている。

「連合政府について」（1945年4月24日）、『毛沢東選集』第三巻

帝国主義者はこのようにわれわれをあなどっている、われわれはこれに真剣に対処する必要がある。われわれは強大な正規軍を

もつだけでなく、大いに民兵師団をつくらなければならない。そうすれば、帝国主義がわが国を侵略したとき、かれらを身動きできないようにすることができる。

新華社記者にたいする談話（1958年9月29日）

農村根拠地をうちたて、 農村をもって都市を包囲する

中国共産党の武装闘争は、プロレタリア階級に指導された農民戦争である。

「『共産党人』発刊のことば」（1939年10月4日）、『毛沢東選集』第二巻

抗日戦争は、実質的には農民戦争である。

「新民主主義論」（1940年1月）、『毛沢東選集』第二巻

強大な帝国主義とその中国における反動的同盟軍は、つねに長期にわたって中国の中心都市を占拠する。したがって、革命の隊列が帝国主義およびその手先との妥協をのぞまず、あくまでもたたかいつづけようとするならば、また、革命の隊列が自分の力をたくわえ、きたえあげるとともに、力のたりないうちは強大な敵と勝敗を決する戦闘をさけようとするならば、都市を利用して農村地域を攻撃してくる凶悪な敵とたたかえるように、また、長期の戦闘をつうじて、しだいに革命の全面的勝利をたたかいとれるように、おくれた農村をすすんだ強固な根拠地にきずきあげ、これを軍事、政治、経済、文化のそれぞれの面で偉大な革命の陣地にきずきあげなければならぬ。

「中国革命と中国共産党」(1939年12月)、『毛沢東選集』第二巻

遊撃戦争の根拠地とはなにか。それは、遊撃戦争がそれによって自己の戦略的任務を遂行し、自己の保存と拡大、敵の消滅と駆逐という目的を達成するための戦略的基地である。このような戦略的基地がなければ、あらゆる戦略的任務の遂行と戦争目的の達成はよりどころをうしなってしまう。

「抗日遊撃戦争の戦略問題」(1938年5月)、『毛沢東選集』第二巻

このような革命の根拠地ですすめられる長期の革命闘争は、主として、中国共産党の指導する農民の遊撃戦争である。したがって、農村地域を革命の根拠地にすることを無視する観点、農民にたいする骨の折れる活動を無視する観点、遊撃戦争を無視する観点は、どれも正しくない。

「中国革命と中国共産党」(1939年12月)、『毛沢東選集』第二巻

農村根拠地での活動に重点をおくということとは、都市での活動や、まだ敵の支配下にある他の広大な農村での活動を放棄してもよいということではない。逆に、都市での活動や他の農村での活動がなければ、農村根拠地は孤立し、革命は失敗する。しかも、革命の最終目的は、敵の主要な根拠地となっている都市を奪取することであって、都市での十分な活動がなければ、この目的を達することはできない。

「中国革命と中国共産党」 (1939年12月)、『毛沢東選集』第二巻

一九二七年からこんにちまで、われわれの活動の重点は農村におかれ、農村で力をつみあげ、農村によって都市を包囲し、そのあとで都市を手に入れたのである。

「中国共産党第七期 中央委員会第二回総会での報告」 (1949年3月5日)、『毛沢東選集』第四巻

人民解放軍は革命の政治的 任務を遂行する武装集団である

人民の軍隊がなければ、人民のすべてはない。

「連合政府について」 (1945年4月24日)、『毛沢東選集』第三巻

われわれの原則は、党が鉄砲を指揮するのであって、鉄砲が党を指揮することを絶対に許さない、ということである。

「戦争と戦略の問題」 (1938年11月6日)、『毛沢東選集』第二巻

この軍隊が強力なのは、この軍隊に参加しているすべての人がみな自覚的規律をそなえているからであり、かれらが少数の人あるいはせまい集団の私的利益のためではなく、広範な人民大衆の利益のために、全民族の利益

のために、一体となり、戦っているからである。しっかりと中国人民の側にたち、誠心誠意、中国人民に奉仕すること、これがこの軍隊の唯一の目的である。

「連合政府について」 (1945年4月24日)、『毛沢東選集』第三巻

中国の赤軍は革命の政治的任務を遂行する武装集団である。とくに現在では、赤軍は、けっして戦争をするだけのものではない。戦争で敵の軍事力を消滅するほかに、さらに大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装化し、大衆の革命政権の樹立をたすけることから、共産党の組織をうちたてることまでのさまざまな重大任務をになっている。赤軍が戦争するのは、たんに戦争のために戦争するのではなくて、大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装化し、また大衆の革命政権の樹立をたすけるために戦争する

のであり、大衆にたいする宣伝、組織、武装化および革命政権の樹立などの目標をはなれては、戦争することの意義がうしなわれ、また赤軍存在の意義もうしなわれるのである。

「党内のあやまった思想を是正することについて」 (1929年12月)、『毛沢東選集』第一巻

八路軍は、さらにきわめて重要な、きわめて顕著なものをもっている。それは政治工作である。八路軍の政治工作の基本原則は三つある。すなわち第一は将兵一致の原則である。これは軍隊のなかで、封建主義を一掃し、なぐったりとなりつけたりする制度を廃止し、自覚的規律をうちたて、苦楽をとにもする生活をするのであり、これによって、全軍は一致団結している。第二は軍民一致の原則である。これは民衆の利益を少しもそこ

なわないという規律を守り、民衆に宣伝し、民衆を組織し、武装化し、民衆の経済的負担を軽減し、軍隊と人民に危害をくわえる民族裏切り者、売国奴に打撃をあたえることであり、これによって、軍隊と人民が一致団結し、いたるところで人民の歓迎をうけている。第三は敵軍を瓦解させ、捕虜を寛大にとりあつかう原則である。われわれの勝利は、たんにわが軍の戦闘によるばかりでなく、敵軍の瓦解にもよるものである。

「イギリスの記者バートラムとの談話」(1937年10月25日)、『毛沢東選集』第二巻

人民解放軍は永遠に戦闘隊である。全国的に勝利してのちも、国内でまだ階級が消滅されず、世界に帝国主義制度が存在する歴史的時期には、われわれの軍隊はやはり戦闘隊である。この点について、どのような誤解も動

揺もあってはならない。

「中国共産党第七期中央委員会第二回総会での報告」(1949年3月5日)、『毛沢東選集』第四巻

人民解放軍は大きな学校でなければならない。この大きな学校は、政治をまなび、軍事をまなび、教養を身につけるところであり、自分に必要ないくらかの生産物および国家と等価交換する生産物を生産するために、農業生産と副業生産に従事することも、若干の中小工場を経営することもできることである。この大きな学校はまた、大衆活動にたずさわり、工場、農村の社会主義教育運動に参加することができる。社会主義教育運動が終わってからも、軍民を永遠に一体とするために、いつでもやるべき大衆活動をもっている。また、いつでも、ブルジョア階級を批判する文化革命の闘争に参加しなければならない

い。このようにすれば、軍事と学業、軍事と農業、軍事と工業、軍事と大衆活動といういくつかの事柄をかねることができる。もちろん、適当に組みあわせなければならないし、主要なものと従属的なものとの区別がなければならぬ。農業、工業、大衆活動という三つの事柄は、一つの部隊では、そのうちの一つまたは二つをかねることができても、三つを同時にかねることはできない。このようにすれば、数百万の軍隊がはたす役割はひじょうに大きなものとなる。

「林彪同志にあてた手紙」、1966年8月1日付『人民日報』社説「全国が毛沢東思想の大きな学校とならなければならない」のことば

人民戦争の戦略・戦術

きみたちはきみたちのやり方で戦え、われ

われはわれわれのやり方で戦う。勝てるなら戦い、勝てないなら去る。

林彪同志の『人民戦争の勝利万歳』に引用されたことば（1965年9月）

〔付録〕

毛沢東同志は、人民戦争の戦略・戦術を、きみたちはきみたちのやり方で戦え、われわれはわれわれのやり方で戦う、勝てるなら戦い、勝てないなら去る、という四句で高度に概括している。

これはつまりこういうことである。きみたちは近代兵器に依拠し、われわれは高い革命的自覚をもった人民大衆に依拠する。きみたちはきみたちの優勢を発揮し、われわれはわれわれの優勢を発揮する。きみたちにはきみたちなりの戦法があり、われわれにはわれわれなりの戦法がある。きみたちがわれわれを攻撃するばあいには、われわれはきみたちに攻撃されないようにし、つかみどころのないようにする。われわれがきみたちを攻撃するばあいには、われわれはかならずきみたち

を攻撃できるようにし、的確に攻撃し、きみたちを消滅してしまう。われわれがきみたちを消滅してしまえるときは消滅してしまい、消滅してしまえないときでも、きみたちに消滅されないようにする。勝てるのに戦わないのは日和見主義であり、勝てないのに無理おしして戦うのは冒険主義である。われわれのすべての戦略、戦役の方針は攻撃するというこの基本点のうえにうちたてられている。われわれが必要のある移動を認めるのは、なによりもまず必要性のある攻撃を認めるという条件のもとでのことである。すべての移動は攻撃するためであり、最後には敵を徹底的に消滅するためである。このような戦略・戦術は、広範な人民大衆に依拠してこそはじめて実行できる。しかも、このような戦略・戦術を実行すれば、人民戦争の優越性を十分に発揮させることができる。敵が技術的装備のうえでどんなに優勢であっても、敵がどんな方法でわれわれにたちむかっても、かれらは受け身になってたたかれる

地位におかれるだけで、主動権はいつもわれわれの手中にある。

林彪同志の『人民戦争の勝利万歳』
(1965年9月)

われわれの戦略は「一をもって十にあたる」のであるが、われわれの戦術は「十をもって一にあたる」のであり、これは、われわれが敵に勝つための根本法則の一つである。

『中国革命戦争の戦略問題』(1936年
12月)、『毛沢東選集』第一巻

われわれの戦術は遊撃の戦術である。かいつまんでいうと、つぎのとおりである。「兵力を分散して大衆を動員し、兵力を集中して敵に対処する。」「敵が進んでくればわれわれは退き、敵がとどまればわれわれはなやませ、敵が疲ればわれわれは襲い、敵が退けばわれわれは追いかける。」「固定した地域の割拠を波状的にひろげていく政策をとる。

強敵が追いかけてくれば、ぐるぐるまわる政策をとる。」「短い時間に、すぐれた方法で、多くの大衆を動員する。」このような戦術はちょうど投げ網をうつようなもので、いつでも網をひろげ、またいつでも網をひきしぼるようにする。ひろげては大衆を獲得し、しばっては敵に対処するのである。

「小さな火花も広野を焼きつくす」(1930年1月5日)、『毛沢東選集』第一巻

われわれの軍事原則はつぎのとおりである。(1) さきに分散し孤立した敵を攻撃し、あとで集中した強大な敵を攻撃する。(2) さきに小都市、中都市および広大な農村を手にいれ、あとで大都市を手にいれる。(3) 都市や地域の保持または奪取を主要目標とせず、敵の兵員の殲滅を主要目標とする。都市や地域の保持または奪取は、敵の兵員を殲滅することによって得られる結果であ

って、これは往々にして何回もくりかえさなければ、最終的に保持または奪取できない。

(4) どの戦闘でも圧倒的に優勢な兵力(敵の兵力の二倍、三倍、四倍の、ときには五倍または六倍もの兵力)を集中して、四方から敵を包囲し、一兵も逃がさないように極力完全殲滅をはかる。特殊な状況のもとでは、敵に殲滅的な打撃をあたえる方法をとる。すなわち、全力を集中して敵の正面とその一翼あるいは両翼を攻撃することであり、それは、わが軍が急速に兵力を移動させて、他の敵軍部隊を粉碎できるように、その一部を殲滅し、他の一部を撃破する目的をとげるためである。損得のつぐなわない、あるいは損得の相半ばするような消耗戦は極力さける。そうすれば、われわれは、全体的には劣勢(数のうえからいって)であっても、ひとつひとつの局部においては、またひとつひとつの具体

的な戦役においては絶対的優勢になり、戦役の勝利が保証されるのである。時がたつにつれて、われわれは、全体的には優勢に転じ、ついに、すべての敵を殲滅するであろう。

(5) 準備のない戦いはせず、自信のない戦いはしない。いずれの戦いにも、あくまでじゅうぶんな準備をし、敵味方の条件を比較したうえで、あくまで勝利の確信をもつようにしなければならない。(6) 勇敢に戦い、犠牲をおそれず、疲労をおそれず、連続的に戦う(すなわち、短期間内に、休まず、たてづけにいくつもの戦闘をする)という作風を発揮する。(7) できるかぎり、運動戦のなかで、敵を殲滅するようにする。同時に、陣地攻撃の戦術を重視し、敵の拠点や都市を奪取する。(8) 都市の攻略の問題では、敵の守備の手薄な拠点や都市は、すべて断固としてこれを奪取する。敵の守備の程度が中くら

いで、まわりの条件からいっても、奪取してよい拠点や都市はすべて、機会をとらえてこれを奪取する。敵の守備の強固な拠点や都市はすべて、条件の熟するのをまってこれを奪取する。(9) 敵からろ獲したすべての兵器と、捕虜にした大部分の兵員で自己を補充する。わが軍の人力・物力の源は主として前線にある。(10) 二つの戦役のあいまをたくみに利用して、部隊の休息と整備・訓練をおこなう。休息と整備・訓練の時間は、できるだけ敵に息ぬきの時間をあたえないために、一般に長すぎてはならない。以上の諸点は、人民解放軍が蒋介石を打ち破る主要な方法である。これらの方法は、人民解放軍が内外の敵との長期の戦いによる鍛練のなかであみだしたものであって、完全にわれわれの現在の状況にかなった方法である。……われわれの戦略・戦術は人民戦争という土台のうえにうち

たてられたものであって、いかなる反人民的軍隊も、われわれの戦略・戦術を応用することはできない。

「当面の情勢とわれわれの任務」(1947年12月25日)、『毛沢東選集』第四卷

戦争のなかで戦争を学ぶ——これはわれわれの主要な方法である

戦争の法則——これは戦争を指導するものが、だれでも研究しなければならない問題であり、解決しなければならない問題である。

革命戦争の法則——これは革命戦争を指導するものが、だれでも研究しなければならない問題であり、解決しなければならない問題である。

中国革命戦争の法則——これは中国革命戦

争を指導するものが、だれでも研究しなければならない問題であり、解決しなければならない問題である。

われわれは現在、戦争に従事している。われわれの戦争は革命戦争である。われわれの革命戦争は、中国という半植民地的・半封建的な国ですすめられている。したがって、われわれは戦争一般の法則を研究するだけでなく、特殊な革命戦争の法則も研究しなければならないし、さらに、いっそう特殊な中国革命戦争の法則をも研究しなければならない。

周知のように、どんなことをするにも、その状況、その性質、それとそれ以外のこととの関連がわからないと、その法則もわからず、どのようにやるのかもわからず、また、それをなしとげることもできない。

「中国革命戦争の戦略問題」(1936年12月)、『毛沢東選集』第一卷

指揮員の正しい部署配置は正しい決心からうまれ、正しい決心は正しい判断からうまれ、正しい判断は周到な、また必要な偵察とさまざまな偵察材料をむすびつけた思索とからうまれる。指揮員は、あらゆる可能な、また必要な偵察手段をつかい、偵察でえた敵側の状況にかんするさまざまな材料にたいして、滓^{かす}をすてて粹^{すい}をとり、偽をすてて真をのこし、これからあれへ、表面から内面へという思索をおこない、そのうえで、味方の状況をくわえて、双方の対比や相互の関係を研究し、それによって判断をくだし、決心をかため、計画をたてる——これが軍事家の毎回の戦略、戦役、あるいは戦闘の計画をたてるにさきだっておこなう状況認識の全過程である。

「中国革命戦争の戦略問題」(1936年12月)、『毛沢東選集』第一巻

戦争の勝敗が、主として戦う双方の軍事、政治、経済、自然などの諸条件によって決定されることはいうまでもない。だがそれだけでなく、戦う双方の主観的指導の能力によっても決定される。軍事家には物質的条件のゆるす範囲をこえて戦争の勝利をはかることはできないが、物質的条件のゆるす範囲内で、戦争の勝利をたたかいとすることはできるし、またたたかいとらなければならない。軍事家の活躍する舞台は、客観的、物質的条件の上にきずかれているが、軍事家は、この舞台一つで、精彩にとんだ、勇壮な多くの活劇を演出できるのである。

「中国革命戦争の戦略問題」(1936年12月)、『毛沢東選集』第一巻

書物をよむことも学習だが、使うことも学習であり、しかもより重要な学習である。戦争から戦争を学ぶ——これがわれわれの主要

な方法である。学校にいく機会のなかった人でも、やはり戦争を学ぶことができる。つまり戦争のなかから学ぶのである。革命戦争は民衆のやることであって、先に学んでからやるのではなく、やりだしてから学ぶのが常であり、やることが学ぶことである。

「中国革命戦争の戦略問題」（1936年12月）、『毛沢東選集』第一巻

『紅旗』、『人民日報』、『解放軍報』 のあとがき

中国人民解放軍建軍四十周年を記念して、ここに毛主席の人民戦争についての語録を発表することにした。

毛主席の人民戦争についての理論は、現代のマルクス・レーニン主義——毛沢東思想の重要な構成部分である。

毛沢東思想は、現代のすべての被抑圧人民と被抑圧民族が解放をかちとるための指針である。そして、もっとも重要なことは、毛沢東同志の人民戦争についての理論でみずからを武装し、鉄砲をもちいてふるい国家機関をうち砕き、鉄砲をもちいて帝国主義とその手先を打ち倒し、鉄砲をもちいて世界全体を改造することである。

プロレタリア階級が権力をかちとってからの社会主義の全歴史的時期に、プロレタリア階級がプロレタリア独裁の強化をはかり、ブルジョア階級がプロレタリア独裁の転覆をたくらむ闘争が、始めから終わりまで存在する。プロレタリア独裁をくつがえそうとするブルジョア階級は、つねに党内のブルジョア階級の代理人をつうじて、必死になって鉄砲を握ろうとする。ソ連において、フルシチョフ修正主義集団が軍事権をのっとして、反革命のクーデターをおこしたが、これはゆゆしい教訓である。わが国においては、資本主義の道をあゆむ党内最大の実権派が資本主義復活を実現させようとして、この十七年らい、大陰謀家、大野心家、大軍閥の彭徳懐や羅瑞卿と結託して、軍隊をのつとる陰謀活動を氣遣いのおしすすめ、われわれの人民の軍隊をかえらの反革命的復活の道具にかえようとしてきた。アメリカをかえらとする帝国主義は、社会主義国にたいして侵略をおこない、転覆活動をすすめようとたくらんで

いる。したがって、社会主義国の革命的人民大衆も、毛主席の人民戦争についての理論を真剣に学習して、資本主義復活の陰謀を粉碎し、プロレタリア独裁を強化するのをもっともするどい思想的武器をいっそうよく把握しなければならない。そして、つねに帝国主義とその共犯者の武力侵略を警戒し、プロレタリア階級の手に鉄砲がしっかりと握られることを保証し、修正主義者が軍事権をのっとして、プロレタリア階級の軍隊の性格をかえるのを防止しなければならない。これは資本主義復活を避けるの最も重要な一環である。

史上に前例のないわが国のプロレタリア文化大革命のなかで、毛沢東思想で武装した中国人民解放軍は、プロレタリア独裁の支柱としての偉大な役割を發揮して、新しい功労をたてた。同時にまた、この大革命のあらしのなかで、新しい教育をうけ、鍛練され、試練をうけた。中国人民解放軍が地方のプロレタリア文化大革命に介入したが、これはわれわれの偉大な統帥者毛主席のプロレタ

リア階級の革命軍隊建設の理論のもっとも新しい
発展である。

ここに、毛主席の人民戦争についての理論を
あらためて学習することは、全党、全軍、全国人
民にとって、きわめて重要な意義をもっている。

毛沢東主席の
人民戦争についての語録

*

1967年 初版発行
出版者 外文出版社（北京）
発行者 中国国際書店
番号：（日）1050-715
定価 20 円
1-J-852Pc
00023

